

園原先生と佛教大学

橋 本 順 聖

園原先生が本学教育学科の教授としてこられたのは、昭和四十八年であり、以後昭和四十九年実験心理学研究室々々、昭和五十一年より昭和五十七年三月十四日心筋梗塞でお亡くなりになるまで心理学研究所々々長、その間昭和五十二年・昭和五十三年の二年間は教育学科主任を兼ねられ、昭和五十四年度よりは嘱託教授として御勤務いただきました。

さて、昭和三十年頃より、心理学関係者間では、京都大学には園原教授・佐藤教授という両巨頭が居られるということが言われていましたし、先生は児童心理学だけでなく、将に発達心理学の我が国における創始者の一人であったことは、周知の事実で、心理学の大御所というべき先生であって、少くとも私にとっては、雲の上の人といってもよいような先生で、こういうイメージの大先生が佛教大学にこられるということ、私などは非常に緊張もし、感激も致しました。

先生が実験心理学研究室々々長に就任された当時の研究室の

状態は、児童心理相談活動、学内の学生相談活動、講義（一般教養の実験心理学・教職課程の教育心理学・青年心理学）、教育学科の学生、社会福祉学科の学生の卒論指導等におわれているような状態でした。そこで先生は、名称を実験心理学研究室を心理学研究室に変えられ、しかも、研究室としての研究方向の確立を計られたのです。先生は、「社会福祉と教育との谷間をうめるような心理学を目ざそうではないか」と言われました。具体的にはどのような心理学をやればよいのか、その時はっきりと私の頭に浮んできませんでした。当時丁度児童相談を始めて六年になりましたので、「心理クリニック・センター六年の歩み」（『佛教大学研究紀要』第六〇号掲載）と題したものを出し、その序を先生に書いていただいたのですが、その中に先生は、「大学附置の相談クリニックの最も重要な存在意義は、そのクリニック活動がつねに厳密な学的検討と密接な関係に根拠をもつという点である」、「大

学その他研究機関がこのような実際の問題にふれる相談機関をもつということは、相互の間の密接な機能関係上に、つねに新しい学問的問題を提示され、学説の再検討、理論構成の重大な転換、新しい研究方法の開発等につながっていくのである」と述べられ、本学におけるクリニック活動の在り方を明確にされました。このようなお考えの下に去る第十八回教育心理学会総会で我々は「施設精薄児の集団遊戯治療に関する研究」を発表し、これはクリニックの臨床活動を行動面からアプローチした研究であり、各方面の研究者達よりうらやましがられました。その後研究室を研究所に拡張され、研究所の目的として「人間生涯にかかわる心理学の基礎および応用に関する総合的研究を行ない、あわせて地域社会の福祉に貢献することを目的とする」（研究所規程）と、はっきりと心理学研究所の方向づけをしていただきました。また先生は、一九七七年五月の『学内報』に「心理学研究所の役割り」と題し、「心理学は人間の生物学的な側面と複雑な人間関係の中で行動の諸変容について、基本的な事実を実証的に探求することに現在では領域限定を行なっています。それでもその研究方法に、実験的事実から理論構成を行なう方向と、教育的臨床的事実に理論の検証を求める方向とに大きな隔りを抱えて居ります。この二つの方向は嘗ては互いに他を排斥し合っていました。が、人間の心理を理解していくためには、どうしてもこの二つの方向の接点を求め、これを統合する可能

性を問題として進めなければならないと思われます。

佛敎大学の心理学研究所で、我々が目ざしているのは、正にこういう意味での心理学の樹立であります。臨床的な人間理解を実験的な理論において根拠づけ、実験的な研究を臨床的教育的な実践において意味づけることによって、現在どちらかに片よっている心理学の研究を媒介していくことに、佛敎大学における心理学研究所としての存立意義を高めていきたいと思っています」と心理学という学問の現在の状態とその目的並に本学における研究所の研究方向や方法までも具体的に指示されて居られます。

このように先生は我々に心理学を学ぶものの学び方や、研究目的・方法についてまで具体的に指示されたと言えましよう。我々は先生の御指導に従って、当研究所を一層充実したものに発展させねばなりません。ここに先生の御冥福をお祈りすると共に、我々の進むべき方向までも示していただいたことに感謝申し上げ、先生の御方針に沿って今後共努力することを誓い申し上げます。

（はしもと　じゅんしょう　文学部教授）